

# 大学入試内容の調査研究

— 中学校教員養成課程保健体育を対象として —

岡 田 猛

## Research Work on the Content of an Entrance Examination into a University

Specially Focussing on Health and Physical Education in  
Secondary School Teacher Cultivating Course

Takeshi OKADA

### I. はじめに

「普通高校の教育は国民のための普通教育として独自に計画されているというよりも、大学の教育方針に影響されている点が多いのであって、それは特に大学入試に関係する」(大学入試の問題点：城戸幡太郎 教育学研究第30巻第2号 p.1) といわれているように、大学入学の高校、ひいては中学校以下の教育のあり方に及ぼす影響は大きい。

人類が営々として築いてきた文化の増大・高度化とともに教育の必要性、重要性が自覚され、しかもそれが学校教育に求められるようになった時に学歴尊重主義が成立した。これは教育尊重主義と学校教育方式の結合であって、いわば内実をともなった学歴であったけれども、このような学歴が社会の価値体系のなかに定着するとともに一方の教育尊重主義の方が形骸化し、内実のぬけおちた「学歴」が偏重されるようになった。

こうした学歴偏重主義ともいべき状況のなかで「学歴」が人生を左右する要素としてますます過大視され、しかも一旦入学した後には卒業にそれほどの努力が要求されないという日本では大学入試にかかって関心がよせられるのである。

このような機能を果たさざるをえなくさせられている大学入試制度の弊害を指摘するのは容易であるが、しかし逆に考えれば大学入試の改善を通じて社会、教育のあり方を改めていくということも可能であり、そのことはその影響力の大きさのゆえにある程度の実効が期待できる道すじでもある。

学校教育の一分科としての保健体育、大学の専攻課程の一つとしての保健体育も上述の文脈のなかで考えていくことが可能であり、その必要性もましてきている。

## II. 調査研究の目的・対象・内容・方法

大学入試は現実的に高校までの履修規程という枠組に制約されているとはいえ、基本的には各大学が自主的に行なうものである。

したがって、大学によってその内容にさまざまな差異が予想されるのであるが、それらの総体的な傾向を把握することはこれからの入試制度のあり方を検討するためにも意味のあることである。本論文は中学校教員養成課程保健体育の入試内容を調査、分析し、概略を示すとともに問題点を析出し、今後の改善の方途を探るための資料を提供することを目的としている。

そもそも大学入試は、①高校までの学習の成果を調べ、あわせて②大学教育課程、とりわけ専攻分野の教育課程履修に関する耐忍性、適性を確認するところに大きな意義があると考えられるので、主にこの2点から学科試験、及び実技試験を分析することにした。

資料は47の国立教員養成大学・学部の昭和51年度募集要項を中心とし、他に必要に応じて「螢雪時代」昭和51年新年臨時増刊号、「高3コース」昭和50年9月号別冊を参考にした。

## III. 調査の結果及びその考察

### 1. 中学校保健体育の入学試験の内容

#### 1) 教科・科目型

保健体育志願者に課せられる教科、科目の数を教科・科目型として示したのが表1である。なお理科の中で物理Ⅰ・Ⅱ、化学Ⅰ・Ⅱ等と表示してある場合は、事例が少なかったこともあって1科目として計算している。総計が45と被調査大学より2大学少なくなっているのは金沢、高知の両大学においては中学校課程保健体育は募集されず、高校課程、特別教科課程において募集されていることによるものである。

表1 保健体育の教科・科目型

教科・科目型	教科型	3			4				5				
	科目型	4	5	4・5	5	5・6	6	7	5	6	7	8	9
教科・科目型別大学数		1	2	3	9	2	3	1	2	6	14	1	1
教科型別大学数		8			13				24				
総計		45											

3教科4科目型は宮城教育大学であるが、そこでは別に「小論文」が受験者全員に課せられているので実質的に3教科ないし4教科5科目型に入れて考えることもできる。

教科型でみるとやはり国語、社会、数学、理科、外国語の5教科を課しているところが24と半数以上を占め、4教科型が17と次に多い。3教科型はきわめて少ない。

又、4教科型では5科目をとまう場合がもっとも多く、5教科では7科目をとまう場合がもっとも多い。

後で分析するように、45大学すべてにおいて保健体育受験者に実技（あるいはこれに保健体育理論が加えられる場合がある…以下同じ）試験が課せられて他の教科・科目に代替されている場合が多いので、教科、科目数において減少していることが考えられる。

そこで大まかな差異をみるために次に小学校課程の教科・科目型を表2に示し、比較することにする。

表2 小学校課程の教科・科目型

教科・科目型	教科型	5							
	科目型	4	5	6	7	8	8・9	9	
教科・科目型別 大学数		1	1	11	28	3	2	1	
教科型別 大学数		1	46						
総 計		47							

4教科5科目型の宮城教育大学はこの他に「小論文」を共通として課しているので実質的には5教科型に近い。とすればすべてを5教科型に入れて考えることもできよう。

この表から明らかのように、5教科7科目型が圧倒的に多く半数以上を占めており、その内容は1大学を除いた27大学において国語2科目、社会1科目、数学2科目、理科1科目、外国語1科目という構成になっている。国語2科目の内訳は現代国語に古典1乙が加えられたもの21大学、古典1甲が加えられたもの6大学、数学は27大学すべて数学I プラス数学II B、外国語は英語指定が12大学、英語を含めた選択が16大学となっている。

さて、この二つの表を比較してみると、科目型において、保健体育の場合には5教科型の占める割合が約53%であるのに対して小学校課程の場合にはほとんど100%であるということ、科目型において、保健体育の場合の平均約6.0科目に対して小学校課程の場合には約6.9と1科目近く多いということ、が明らかである。

これは前述したように保健体育の場合に課せられる実技試験に他の教科・科目が代替させられていることによるものであるが、次に項を改めて代替の内容について分析を加えてみることにしよう。

## 2) 実技試験による他教科・科目の代替

実技試験による他教科・科目の代替状況を示すと次のようになる。ここで、他専攻とは、特に専攻によってその分野の科目数がふえる場合の多い中学の理科、数学、技術、及び保健体育と同一歩調をとる場合の多い中学の美術、音楽を除いたものである。

○実技を他教科・科目に代替……24大学

- 実技及び理論を他教科・科目に代替……4大学
- 他専攻プラス実技（代替なし）……16大学
- 他専攻プラス実技及び理論（代替なし）……1大学

被調査45大学すべてにおいて保健体育受験者に実技試験が課せられており、そのうえにさらに保健体育理論が課せられているところが5大学ある。次に、なんらかのかたちで代替の措置をとっている大学は28に達し、代替措置をとっていない大学は17である。

なお代替の平均科目数は1.2となっており、実技試験に1科目強の重さが与えられていると考えることができる。

さらに代替の内容を細かく分析してみると、指定、選択のかたちで数学に代替している大学が17、社会及び理科ないしその一方に代替している大学21となっている。合計が38となり、代替している大学数28より多くなっているのは、たとえば社会、理科、数学のうちから選択して1教科に代替されている場合が5大学あるからである。

次に重要なことであるが、1教科複数科目で出題されてそのうちの1科目に代替されている場合、すなわち代替によって主要5教科を欠くことにならないところが7大学であるのに対して、代替された結果として5教科のうちのいずれかの教科を欠くことになるところが21大学あるということである。しかもそのうち指定として数学が代替される場合、すなわち受験者が数学を受験したくてもできないところが8大学、あるいは選択のしかたによっては数学が受験されないところが5大学と多い。

保健体育における研究の到達水準が未熟であるとの批判は甘受しなければならないけれども、総合科学としての性格を有し、そのことを標榜しているかぎり、受験生に5教科にわたる基礎的学力を求めるのは当然であり、そういう意味で21の大学がいずれかの教科を欠いていることは問題である。なかんずく数学が欠落している場合が選択までも含めて13大学と多いことは、体育管理、統計、評価をはじめとして数学的素養が強く求められていることを勘案すると大きな問題であり、せめて数学Ⅰは必須とすべきである。体育教師であるまえに一般の「教師」である必要があるから、5教科のいずれかを欠くような代替は止めるべきであろう。

なお保健体育理論を課することの是非については、高校までの履修規程に含まれている点で問題はないが、私見としては主要5教科によってそのレディネスを十分判断できるものとするので除外してもなんらさしつかえないものとする。

### 3) 実技試験の配点に占める比重

実技試験が配点のうえでどのくらいの比重を与えられているかみてみよう。

生の点数でみると100/500が11大学、100/600が9大学と多く、他はひじょうに多様である。そこで全配点における実技試験の占める比重を全体（37大学）の平均でみると、約0.194、すなわち約19%の比重を占めていることがわかる。

なお配点を公表しない大学が少なからずあること、また今述べた数値が「螢雪時代」や「高3コース」の雑誌にその資料の多くをおうていること、などの不十分さは、各大学への郵送法などによる厳密な調査によってカバーされる必要がある。

## 2. 実技試験の内容

### 1) 出題形式

出題の形式についてみると、主に次の5つのタイプに分類することができる。

なお形式表現の注釈は次の通りである。

- 群……複数の領域をその中に含む範疇。
  - 領域……具体的な運動種目をそのうちに含む範疇 たとえば器械体操，陸上競技，水泳など。
  - 種目……領域に含まれ，具体的運動名称を有するもの，たとえば，球技という「領域」にはバレーボール，サッカー，ラグビー等々の「種目」が含まれる。
  - ×……左側の項目が右側の項目を制限するという意味 たとえば出題形式②で説明すると，いくつかの指定された領域の中から，それぞれに含まれる種目を示された数だけ選択するということになる。
  - +……いわゆる附加の意味。
- ① 指定（種目）……11大学
  - ② 指定（領域）×選択（種目）……7大学
  - ③ 共通（運動適性検査）+選択（種目）……7大学
    - 共通（ " ）+指定（群）×選択（種目）……1大学
    - 共通（ " ）+指定（領域）……1大学
    - 共通（ " ）+指定（種目）……2大学
    - 共通（ " ）+選択（領域）×選択（種目）……1大学
  - ④ 共通（種目）+選択（種目）……7大学
  - ⑤ 指定（群）×選択（領域）×選択（種目）……4大学
    - 不明……4大学

出題形式について特に問題にしなければならないのは，具体的な運動種目以外に，共通としていわゆる運動適性検査（大学によっては基礎体力検査，基礎的運動能力検査，一般的運動能力テストと称されている。）といわれるものを課する必要があるかどうかである。

本調査では不明を除く41大学中，12大学，約29%が運動適性検査を課している。

本学部の体育科開設講義題目82のうち45題目と約45%を実技題目が占めているように，保健体育科において実技は中心的位置づけを与えられている。したがって入学者選抜に際しては，これらの開設実技題目の履修に十分耐え，さらにはそこで得た技能を一層伸ばしてゆけるレディネスを身につけているかどうか，を判定することが重要になってくる。

出題形式③を除いた他はすべて、結果的には幾つかの種目によってレディネスをみようとするのであるが、はたしてこれで十分であろうか。もちろん種目によってはその技能が他の種目に転移する可能性の大きいもの、換言すれば、その能力さえみれば他の種目の能力はだいたい推して測れるという種目があるにはちがいないが、しかしそれにしても開設実技題目にみられるような、バラエティに富んだ運動能力をカバーするには無理があることは否めない。

そこで結論としては、多様な開設実技題目の履修に耐えうるかどうかをみるためには、共通としていわゆる運動適性検査を課す必要があり、その他に前述したところのできるだけ運動能力一般の指標性に富んだ種目を3ないし4指定あるいは選択の形式で課するのが望ましい、ということになる。

次に運動適性検査の内容を簡単に分析してみると、出題形式③に属する12大学のうち詳細な点で不明の3大学を除く9大学において、「スポーツテスト」のうち「体力診断テスト」を主として実施しているもの3、「運動能力テスト」を主として実施しているもの4、それらの混合2、というようになっている。今後に残された問題であるが、大学の教育課程、地域の文化的環境に応じてその内容も再検討される必要があるように思える。

なお不明となっている大学の中には「運動のできる服装を用意してくること」というように実技試験を軽く扱っているように察せられるところもあった。

## 2) 出題領域型

受験者にとっては選択の範囲を意味する出題の領域数をみると大きく3つのタイプに分類することができる。

- ① 器械体操+陸上+球技+ダンス……16大学
- ② ①+格技……16大学
- ③ ②+水泳……3大学
- その他……2大学
- 不明……8大学

受験者のもちうる特技をできるだけ評価するという立場からすると、指導要領に示された7領域すべてを出題する③のタイプが望ましいけれども、特に季節的な領域（水泳）をはぶくところがほとんどであり、性的な領域（格技）を除いている大学も15と多い。ただし、女子のダンスについては性的な領域であるにもかかわらずすべての大学が出題しており、指導要領に示されている以上に女子とダンスの結びつきが歴史的、文化的に大きいことを窺わせる。

また、次の出題種目型についてもいえることであるが、試験官の数、質（一人の教官で幾つかの領域を担当している場合が多い）や施設・設備（特に水泳に関しては試験時期からみて温水プール

が必要。)によっても現実的な制限をうけていることが考えられる。

なお、指導要領では明確に区別されている「体操」、「器械運動」の領域は、ほとんどの大学でその一般的、社会的用法にしたがって「器械体操」として統一されているのでそれにしたがった。

### 3) 出題種目型

出題種目数を球技について分析してみると次の4つのタイプないし段階に分類することができる。

- ① 中学校必須段階 (バスケットボール, ハンドボール, バレーボール, サッカーの範囲から出題)……18大学
- ② 中学校選択段階 (①にソフトボール, テニス, 卓球, バドミントンを加えた範囲から出題)……1大学
- ③ 高校必須段階 (①にラグビーを加えた範囲から出題)……4大学
- ④ 高校選択段階 (②にラグビーを加えた範囲から出題)……4大学
- 不明……18大学

ここでは出題種目の範囲にラグビーが入っているかどうかキポイントになっているが、調査結果のあきらかな27大学のうち約7割にあたる19大学がラグビーを含めていない。このことは中学校課程の専攻であるから大半がラグビーがまだ入ってこない中学校に就職するであろうという前提に基づいたものと思われるが、高校までの体育学習の成果を確認するという入学試験の側面、あるいは中学校一級普通免許状が同時に高校二級普通免許状であるということ、からして慎重に決定されるべきであるが、私見としては高校必修段階が妥当ではないかと考えている。

### 4) 受験領域型

大学の多様な出題形式のうちから受験者が最終的に受験することになる領域数は表3の通りである。

表3 受験領域型

領域型	1	2	3	3・4	4	4・5	不明
大学数	7	5	5	14	4	1	9
補正大学数	2	8	5	14	6	1	9
総計	45						

\*補正大学数…運動適性検査を1領域として計算した時の大学数

表で3・4あるいは4・5として示されているところは、たとえば、①バレーボール、②サッカー、

④バスケットボールまたはハンドボール, ⑤格技(柔道, 剣道, 相撲のうち1種目)の中から2種目選択するといったように, 同じ領域に属する種目が異なる選択肢として分類されていたり, あるいは必修以外の選択分野において選び方によって1領域ふえたり, する場合である。

表から次のことがあきらかになる。3ないし4領域にわたって受験者の能力をみる大学がもっとも多く, 調査結果のあきらかな36大学のうち約64%にあたる23大学がその範疇に属する。領域型が1の7大学のうち5大学までが出題形式③に属しているのも他に共通として運動適性検査が課されているから実質的には3・4の領域型を中心としてもっと正規分布に近い姿になることが予想される。運動適性検査を1領域として計算した補正大学数によると平均受験領域数は3.1となる。

#### 5) 受験種目型

大学の多様な出題形式に対して受験者が最終的に受験することになる種目型は表4の通りである。

表4 受験種目型

種目型	1	1~3	2	2・3	3	4	3~7	5	6	7	7・8	11・12	不明
大学数	5	1	3	1	1	3	1	2	1	1	1	1	24
補正大学数	1	4	2	3	1	3	1	1	2	1	1	1	24
総計	45												

\*補正大学数…運動適性検査を1種目として計算した時の大学数

半数以上の不明がでたのは, たとえば陸上などの一部を領域で示し他を種目で示すというように種目数を断定できない表示のしかたがなされているためであり, これは資料が募集要項にのみ制限されたためであるから詳細な追跡調査を行う必要がある。種目型に範囲があるところは受験領域型のところで述べた事情に加えて, たとえば「領域ごとに1~2種目を試験場で指示する」というようにある範囲で示されている場合があることによるものである。

限られた事例を検討すると, 受験種目型はまことに多様であり分布の範囲が広いが, はじめの3つの項目に含まれる9大学のうち8大学までがその他に共通として運動適性検査を課していることを考慮して, それを1種目にみなすことができるとすれば(補正大学数), 実質的に2~4種目に集中している傾向がわずかにみられる。また同様の計算方法によると平均受験種目数は4.0になる。

## IV. 結 び

47の国立教員養成大学・学部を対象に, 昭和51年の募集要項を主な資料として中学校課程保健体育の入試内容を分析し, 以下の結果を得た。

1. 保健体育の教科・科目型では, 5教科7科目型(14), 4教科5科目型(9), 5教科6科目型(6)が多く, 教科型においては5教科型が約53%を占め, 平均科目数は約6.0である。



一方、小学校課程では、5教科7科目型(28)、5教科6科目型(11)が多く、教科型では5教科型がほとんど100%を占め、平均科目数は6.9である。

2. この差異は保健体育に課せられる実技試験による他教科・科目の代替によって生じる。

調査45大学すべてにおいて実技試験が課されており、そのうえに保健体育理論が加わっているのは5大学である。調査45大学のうちで代替措置をとっているのは28大学、代替科目数は平均して1.2である。28大学のうち代替措置によって5教科のうちのいずれかを欠いている大学は21あり、なかでも数学の占める割合は選択も含めて13と多い。

これは多様な分野からなる総合科学としての保健体育の性格からして問題であり、入試が5教科にわたること、なかんずく数学Iは必須とすることが望ましい。

3. 全配点に占める実技試験の比重は約19%である。

4. 実技試験の出題形式をみると、共通して運動適性検査を課しているところは12大学(約29%)にとどまっているが、多様な実技からなる教育課程に対するレディネスをみるには是非必要であるように思える。それに加えて運動能力一般の指標性に富む種目が3ないし4課されるのが理想的であろう。

5. 出題領域では水泳は大変少なく(3)、格技もおよそ半数のところで出題されているにすぎない。

6. 出題種目を球技についてみると中学校必修段階がもっとも多い。このことは高校で選択必修とされているラグビーを欠くことになるので問題であり、大学入試の性格からして高校必修段階が妥当ではないかと思われる。

7. 受験領域型は3ないし4領域が多く、約64%を占めている。なお運動適性検査を1領域と考えて計算すると平均受験領域数は約3.1となる。

8. 限られた事例から判断すると、受験種目数の分布は多様であるが、運動適性検査を1種目に計算すると2~4種目に集中する傾向がわずかにみられ、平均種目数は約4.0になる。

なお文中でたびたび指摘しておいたように資料の不足、不備からくる調査結果の不十分さは、これからの詳細にわたる調査研究で補強してゆきたいと考えている。

本調査研究の概略は第25回九州体育学会(1976. 10. 10. 於宮崎大学)において発表した。

#### 参 考 文 献

- 1) 清水義弘編：日本の高等教育 第一法現 1968
- 2) 城戸幡太郎：大学入試の問題点 教育学研究第30巻第2号 1963
- 3) 日本教育社会学会編：高等教育の社会学 東洋館出版社 1971
- 4) 高部岩雄：体育学原論 消遙書院 1962

### Summary

I analyzed the contents of entrance examinations for health and physical education in secondary school teacher cultivating course on 47 national teacher cultivating universities and colleges (two universities of them don't registrate health and physical education in secondary), utilizing as materials 1976's lists of the entrance requirements.

The results are follows;

1) On sphere-subject pattern in health and physical education, 5 spheres 7 subjects pattern (14), 4 spheres 5 subjects pattern (9) and 5 spheres 6 subjects pattern (4) are predominant. On sphere pattern 5 spheres pattern accounts for about 53 percent and the mean subject number is about 6.0.

As for primary school course, 5 spheres 6 subjects pattern (28) and 5 spheres 6 subjects pattern (11) are dominant. On sphere pattern 5 spheres pattern accounts for almost 100 percent and the mean subject number is about 6.9.

2) These differences are derived from the substitution of the exercise examination set in health and physical education for spheres and subjects.

The exercise examination is set in all of the universities (45) and 5 of them set the theory examination in health and physical education moreover. The number of universities which take a substitution-step is 28 and the mean substitutional subject number is 1.2. 21 universities lack any of main five spheres (language, civics, mathematics, science and foreign language) by means of substituting and among others mathematics occupies 13 cases.

Because health and physical education is inter-disciplinary, it is to be desired that five spheres should be all set and among others mathematics 1 necessarily.

3) The percentage which the exercise examination accounts for in distribution of marks is about 19 percent.

4) On problem-setting style in the exercise the number of universities which set the exercise fitness test commonly is only 12 (about 29%), but it seems essential for the exercise fitness test to be set commonly to examine the readiness against a variety of curricula on exercises.

5) On problem-setting region swimming is rare (3) and *kakugi* is only about half.

6) On problem-setting event pattern of ball games the compulsory level in secondary school is most. In this case, since Rugby football which is semi-compulsory in high school results in lacking, it should seem that to set the compulsory level in high school is reasonable in view of quality of the entrance exam.

7) On undergoing region pattern 3 or 4 regions pattern accounts for about 64 percent. Furthermore when the exercise fitness test is reckoned for one region the mean undergoing region number is about 3.1.

8) Judging from limited cases, the undergoing event number ranges variously. When the exercise fitness test is reckoned for one event the undergoing event pattern develops slightly a tendency to concentrate on 2-4 events and the mean event number is about 4.0.